

拘
束
魔
具
の
虜

光魔少女

高岡智空
挿絵／草上明



試し読み版

第一章	二人の魔少女	006
第二章	予期せぬ陵辱、闇の侵蝕	070
第三章	魔少女の畏、明かされる真実	125
第四章	闇魔少女メイ	192
淫章	闇魔娼女の学園行事	269

登場人物紹介

Characters



ヤミヨ

闇の世界の拡大を狙う魔少女。
魔生物を操り、メイに迫ってゆく。

メイ(響 芽衣)

光魔少女メイとして闇の魔少女ヤミヨと戦う。いつもは
学園の生徒会長として、元気に明るく過ごしている。

とこみね やちよ 常峰八千代

芽衣とともに生徒会に所属、
副会長を務める少女。

シュカ

メイを光魔少女にした、光の
魔生物。白い蛇の姿。

リンド

ヤミヨに従う、闇の魔生物。
黒い狼のような姿。

「っ……このくらいで、負けたりしないっ……」

気持ちはもちろんそうだが、けれど間違はなく、この状態では勝ち目などない。こちらから魔力で干渉しようとはしているが、断ち切れるまでに数十分はかかるだろう。これだけ細いのに、上質な鋼のように強固な魔力の塊だ。

「大変ねえ、その無様な状態で私を倒して、身体を自由にして、校舎内も浄化しなければいけないなんて……ふふ、間に合うかしら」

「間に合わせるっつ！ 絶対に——」

「——現実を見ることね、この愚か者っ……あなたは負けたの。だから敗者として——そして罪人として、裁かれるのよ……」

ヤミヨが冷酷な眼差しで見据えた直後、ニヤアアアッと歪みきつた笑みを浮かべた。

「私が丹精込めて育て上げた、可愛いサキユミミックによつてね！」

感極まったようにゾクゾクと背筋を震わせ、彼女の鞭が勢いよく振り上げられる。ハッとして身構えるメイだったが、その刹那——。

「なにっ……んひうつつっ!? ひやつつ、んつっ……くあああああつっつ！」

なにかが——ヌラヌラとした感触に、脂身のような弾力と柔らかさ、そして生温かい不気味な温度の塊が、ズルリとタイツ越しの脚を撫で上げた。

(いやあああつっ！ なにつ、なんなのおっ!!)

それに気を取られた瞬間、太ももをズルズルと這い回り、舐め上げられるような感触が

奔る。恐怖と怖気から、反射的にそれを払おうとするが――。

「あぐつつ……つううつつ……んひいつつ！」

左腕は動かない、そして右腕はバトンを握り、身体を支えるので精いっぱいだった。対応が遅れた、その僅かな時間に、謎の感触は太ももをドロドロに濡らし、肌に密着する。先の魔法の衝撃で引き裂かれたタイツの穴から潜り込み、レオタードを押しつけ、瞬く間にメイの股間へ埋まってしまった。

「やだっ、来ないでっ……このおつつ！」

握ったバトンに力を込め、魔力の波動を飛ばし、異物を払おうとする。けれど――。

「よそ見しているなんて、随分と余裕ね」

それを邪魔するのは、自由にこちらを狙い撃ちにできる、ヤミヨの魔法攻撃だ。攻撃に使いかけた魔力を、メイはやむなく防御に回す。

「――つつ！ モウ・ムウ！」

同じ過ちを繰り返さないよう、柔らかなドームで周囲を覆い、攻撃を弾き飛ばすことは成功した。だが片手で杖を支えているせいで、大規模な攻撃に転じることはできず――防御で手一杯になってしまったために、異物への対処が行えない。

（なにつ、があっ……あひいつ！）

レオタードを押し上げ、淫裂に挟まった粘膜質の異物が、そこからなにか――細長いドロドロとしたものを伸ばしてくる。一拍遅れ、それが股間に挟まる異物と同じ感触、同じ

蠢動なのだと気がついた。

(つつ……これ、生きてつ……んふううつつ！)

その生物が、己の身体を細く振って引き伸ばし、触手として伸ばしているのだと察する。芋虫のような感触が、レオタードに押さえ込まれてモゾモゾと蠢きながら、伸ばした触手を肌這わせた。股間の周り、太ももの付け根、太もも——そして尻房。

「ひつつ——いやあああつつつ！」

叫ぶつもりなどなかった。それにも拘らず、本能に訴えかけるような生理的嫌悪感に煽られ、メイはたまらず悲鳴を上げてしまう。

(なに、いまのつ……なにか、アソコに——)

肌に這った触手は無遠慮に撫で回し、奥で蕩ける粘膜にまで、音を立てて啜えついてきた。それと同時に進つたのは、神経に電流を注ぎ込まれたような鋭い痛みと、触れられた部分からなにかを吸い込まれたような、切なくなる熱い疼き。

「んあうううつつ!!」

細く振れた長い舌、それが淫裂に感じたものの印象だった。張りついた感触は、レオタードの奥に隠されたメイの媚肉——誰にも触れさせたことのない、穢れない肉襞を啄むように擦り、吸い上げる。

「ふぐつつ、んひいいつつつ！ なんつ……んつ、あああつ……なに、がつ……」

「言つたでしょう？ サキュミミック——私の育て上げた、自律行動型の闇魔生物よ。単

純な命令しか聞けないけれど、その分、本能には忠実なの」

「ほん、のっ……ううんっっ！」

それがなんなのか、問い返すよりも先に、股間に張りついたおぞましい闇魔生物が、蠕動するように蠢きだす。そのヌルついた身体をさらに強く、メイの肌に、股間に押しつけ、密着しだしていた。

(ひいひいっ！ いっ、やあぁっ！ 離れて！)

脚をもじもじと擦り合わせ、必死にそれを排除しようとするが、どういうわけなのか。まるで吸盤でも用いて張りついているかのように、触手型の闇魔生物はビクともせず、股間から離れてくれない。

(な、んでっ……くううっ!!)

両手でそれを掴み、引き離すことは不可能。ならばせめて片手だけでもと思うが、それを邪魔するのがヤミヨの攻撃だった。

ある程度の制御を行っているためか、彼女の攻撃も緩やかかといえは緩やかだ。しかし、不快な感触に苛まされ、集中を乱され、必死で杖を掴むことしかできないメイには、防御するのもやっつとである。

攻撃から懸命に身を守りつつも、股間を襲う脅威にはまったくの無抵抗になってしまう。それをいいことに、メイに取りついた触手——サキュミミックと呼ばれていたこの生物は、己の体表を濡らす粘液を、ベチャベチャと股間に塗りたくっていた。

「あつ、はあああつ……んふつつ、ふううつつ！」

「あらいやだ、艶めかしい声だしちやつて……そんな薄気味悪い化け物に弄られて、ひよつとして興奮してるんじゃないでしょうねえ？」

「だあつ……れつ、がああつ……あふうつつ！」

強がって叫び返したものの、それと同時に、股間の柔らかな粘膜を舐め擦られる。最も敏感なその部分にまで、こよりのような触手が絡みついたのを感じ、メイはたまらず尻を突きだし、腰を跳ねさせた。

（やつ……だめつ、そこおつつ……んくうつつ！）

ゾワゾワツと背筋に電流が走り、頭が真っ白に明滅させられ、瞳が垂れ下がってしまう。メイにも人並みの、あるいはそれ以上の性知識くらいはある。女性がセックスに使う器官、そこには淫らな穴とオシッコの穴、それに加えてもう一つ——快感を貪るためだけに存在するような、淫猥な器官があるのだ。そしてご多分に漏れず、メイもそこに対する刺激の味を経験済みであった。

もちろんそれは、入浴中うつつかり触れてしまっただけで、それ以降は罪悪感から触れようともしていないのだが、その感覚ははつきりと覚えている。

（だあつ、めええつ……んひううつつ！ そえつ……やつ、剥いちや、やらつ……あぐうつつ！ ひやつつ、めくれつ、ひやつつ……あうううつつ!!）

包皮が細い触手の先端で引つ搔かれ、丁寧に捲り返されてゆく。その奥に息づく、プツ

クリとした赤い肉粒。痛いくらいに膨らみヒクつき、テラテラと濡れ光っているのが見なくてわかるそこに、触手が隙間なく巻き付いていった。

「んあひいいい——つつつ！ いひつつ、ひああつつ……あああああつつ！」

ガクンガクンツと腰を跳ねさせ、喉を開き切つてメイは叫んでしまう。バトンはもはやロッドではなく、完全に杖としての役割を為すようになり、それによってなんとか身体を支えているような有様だった。

「メイッ、メイッ!! しっかり、してっ……」

氣遣うように叫んでくれるシユカ、そちらにもメイの股間に対処する余裕はない。防御魔法の展開を補助しながら、リンドを牽制し、さらには学内の魔法陣展開を極限まで遅らせている——等々。メイの肩に留まつて、様々な役割を担っていた。

「はーっ、ふーっつ……んっつ……くううっ！」

レオタードに粘り気ある液が染み広がり、その感触が肌に伝わつて、メイの顔が真っ赤に染まる。内股に折れた膝の下には、バタバタと勢いよく蜜汁が滴つて、コンクリートに卑猥な水滴跡をいくつも刻み込んで、ヤミヨの目を愉しませていた。

「あら、今度はおもしろかしら？ うふふ、いい気味だわ……これまで散々邪魔をしてくれた、その分の恥辱をたっぷりと味わつてもらいたいものねえ」

「くっつ……うううんっつ!! あっ、あああっ！」

強気に瞳をツリ上げるが、直径五センチはあるかという芋虫触手がまたも、レオター

ドに包まれた状態で身を躍らせると、その刺激に表情が緩む。

だが触手は、そんな刺激を与えるためだけに、動いたのではなかった。

(こ、んろっ、はああ……あつぐううつ!!)

柔軟に形を変えて伸び縮みするそれが、身体の端っこを大きく伸ばして、レオタードの食い込んでいた、メイの尻肉に顔を埋めたようだった。汗で蒸れた肌を、そして不潔な排泄口を撫でられたような感触に、羞恥と憤りを覚え、真っ赤になるメイ。

しかし、そんな感情を露わにさせるヒマなど与えない——とでもいうのか。尻谷間に埋まった触手は、そこにも細かな触手を張りつけていく。

「なっんいっつ！ ひてっ、るのおっ……いひっ、やつ……そこ、だめええっ……」

動かない左手を懸命に動かそうとする、その努力を嘲笑うように、動けないメイの尻穴に、太い触手がピツタリと密着した。そのまま、全身で螺旋を描くような回転を見せ、グイグイと身体の端——おそらくは頭だろう、それを捻じ込もうとしてくる。

(う、そっ……いやっ、それはいやあぁっ……)

だが、細かい触手が尻谷間に張りついて、そこを大きく割り広げてくる。隙間から空気が流れ込み、汗に濡れた肌と粘膜が冷たく刺激され、ゾゾッと背筋に悪寒が走った。

「んひゅうっ!! ひやつつ、さわ、るなあっ……んいっつ、くあああぁんっ！」

悲鳴を上げ、顔を跳ね上げさせた瞬間、メイの背中が柔らかく反った。そして内股のまま腰が引け、お尻をさらに突きだすはしたない体勢になる。

突きだされた尻谷間の奥では、括約筋が弛緩し、懸命に狭めていた菊皺が綻びかけていた。そんな隙を、この淫らな闇の生物が見逃すはずもない。

——グジュルツツ……ヌチュオオオツツ……グジュツツツ、ジユボオオオツツ！

「んっぐううつつつ?! いひあああつつ！」

本来、排泄する役割を担う穴を外側からこじ開けられ、異物を捻じ込まれる感覚が、直腸へ突き抜ける。怖気と嫌悪が進ると同時、敏感かつ柔らかな粘膜を逆撫でされる刺激に、メイの膝は脱力してしまつたように、カクンツと折れた。

(な、ふつつ……んんんううつつ！)

身体を支えることに気を取られた瞬間、クリトリスが急激に締めつけられる。進む痛烈な快感に括約筋が緩まされ、たわんだ腸肉を嚙りながら、蠕動する触手がさらに奥へと埋没してゆく。

「ひやあああつつ！ やんつ、あううつ……入つて、こないつ……でえつ……くひいつ！」

嫌悪からの拒絶の声、そこに嘘はない。けれど、それ以上にメイが感じさせられているのは、肛門の肉皺を捲られ、そこを通過し、薄桃色の腸襞を撫でられるという、排泄にも似た感覚——原始的な本能に基づいた、生理的快感だった。

(なつ、に……ひいつつ?! なんてつ、私のおつ……お、お尻いい……んはあああつ！)

触手芋虫の動きは非常に緩慢ながら、その動きが刺激を和らげ、かえって菊肉に感触を馴染ませてくる。奥へ這い進んだかと思えば、優しく搔きほぐしながら引きだされる——

そのたびに下腹部がざわつき、腰が跳ね、お尻がますます突きだされた。

「あつはははははは！ 無様ね、メイ……最ツツ高につ……いえ、最ツツ低最悪の無様さよ、あなたつ！ 触手にお尻犯されてクネクネ腰振って、発情させられるなんて女失格なんじゃないかしら！」

「——つつ！ わ、私はそんなつ……あつ、くううんつつ！ んひつ、いひあああつ！」

思わず跳ね上がった声に、顔を伏せて口元を覆う。その隙間から唾液がダラダラと流れ、顔を隠す腕にベツトリと塗りつけられていった。

「いいわ……せつかくだし、一度イカせてあげる。それを持って嘔み締めなさい……私に刃向かった愚かさど、自らの浅ましさをね！」

「ら……らひ、いつへええ……んひやふうつつ！」

攻撃の手を止めたヤミヨが、おそらくは触手に関与しているのだろう。マリオネットを操るように指をくねらせた瞬間、触手がさらに激しく蠢きだす。

（んつああああつつつ?! 奥つ、奥きてるううつ！ はあああつ……す、ごつ……扶れ、てえつ……んくうつ！ あああつ、ドリルみたいいつつ！）

全身をはつきりと回転させて螺旋を描き、菊壺が軟体生物に挟り、拡張されてゆく。直腸を穿ち、結腸にまでその先端を密着させて、さらにグリグリと押し込んでくる感触に、視界が霞み、思考が明滅し、表情が崩れさせられたことにも気づかない。

「んつぐううつつ、ふやああああつつ！ あひつつつ、はひつつ、はひいいつつ！」



「はあつ、はつあああんつ……あむつ、んぐつ、じゅぷつ……じゆるるうつ……」

「なにをおいしそうに味わっているの？ 私は奉仕なさいと言ったのよ、まったく——」

その言葉に羞恥を感じつつも、舌の動きが止められない。膣穴に舌を挿入させ、愛蜜が流れ込んでくると、喉を大きく鳴らしてしまう。男子に犯され、おぞましい精液を啜らされたことを思えば、ヤミヨに対する行為は、まだマシなことのように感じられていたのだ。（どうして——ヤミヨちゃんは、私にあんなこと……八千代ちゃんまで巻き込もうとする、ひどい子なのにつ……んぐつつ、んんんうつつ!!）

むせ返るような牝臭に頭を蕩かされながらも、そう考えていたのを邪魔するように、指先で弄られていた菊肉に、硬い感触が鋭く捻じ込まれる。

「くふうつ、ふああああつつ！ な、なにいつ……んぐつつ、あううんつつ……」

だがそれは、先ほどから触れていた彼女の指ではない。指より大きく、平たく、硬い——そして温かみのない、無機質な感触だった。

「ヤミヨちゃ——さ、様つ、なにを……んぐつつ！」

「あなたの大好きなお尻を犯してあげてるのよ、この変態……乗馬鞭までおいしそうに啜え込んで、本当にどうしようもないケツマンコね！」

乗馬鞭——すなわち、それはヤミヨの杖ということだ。相手の武器が自分の淫らな、そして不浄な肉穴を犯していることを知った瞬間、その屈辱にゾクンツと背中が痺れ、視界

が揺れるように眩んでしまう。

「や、やらああ……やめて、ヤミヨ様あつ……」

「ふふつ、すつかり上下関係を覚えたようね……さすがは優秀な生徒会長様だわ」

挿入するように呟いたヤミヨの手が上下に動くと、握られた杖も連動し、菊穴を穿って挿入される。今日までの十数日で触手に開発された不浄の穴は、屈辱的な扱いをされているというのに、硬い感触に擦られる刺激で、どうしようもなく緩みだしていた。

(んっあああああつっ！ ダ、メえ……八千代ちゃんのために、頑張ってるのにつ……)

親友を助けるための、大事な時間稼ぎだというのに。後ろの穴を穿られ、腸汁だけでなく愛液まで溢れさせて感じていることが、恥ずかしくてたまらなかった。それを目にしたヤミヨがどんな表情をし、自分のことをどのように思ったか——それを想像すると、さらに途方もない羞恥が込み上げ、尻穴が過敏にさせられてゆく。

「やつ、んううつ……やめ、へええ……いひいつ、あひいいつ！ お、おひりつ、やらのおおつ！ そおつ、んんうつつ……あはあああつ、ズボズボしひやいやああつ！」

「嘘が下手ね、メイ……ほら、こんなに深くまで入れたって嫌がるどころか、ますます強く食いついてくるじゃない！ 抜こうとすると——ほおら、とつても恥ずかしい反応をしているわよ？ お尻のヒダすべてを絡みつかせて、放そうとしないだなんて！」

そう言いながらヤミヨが激しく杖を挿入させると、蕩けた菊裳が掻き巻くように抉られ、凄まじい快樂電流が脳天を痺れさせた。そんなことしたくもないのに、勝手に腰が動いて

尻を振り、こじ開けられる肛門までが、浅ましくヒクついて開閉するのを感じる。

「ひやつ、らのおお……んあううつつ！ やめつ、ひええ……あひいいつつ!!」

だらしのない肉皺に、奥から溢れた腸液がネットリと絡みついて、卑猥な水音が響き始める。メイは耳まで真っ赤になって恥じ入るが、ヤミヨに押さえつけられ、耳を塞ぐこともできない。たまらず、恥辱に抗う意思だけでも見せつけようと腰を暴れさせると、それを諫めるようにヤミヨの平手が振るわれ、尻房を思いきり打擲した。

「ケツマン汁ダダ漏れのっ、変態牝奴隷の分際でっ！ なにがやめて欲しいよっ！ このっ……嘘吐き淫乱女あっつ！ これは躰けよっ、ありがたく受け取りなさいっつ！」

「んひいひいいつつ!! やらっつ、はひいいつつ！ あひっつ……いひあああっつ！」

バチンッ、ビシィッと尻肉に痛みが走り、けれどその衝撃が腸粘膜を痺れさせ、より強く杖の感触を意識させる。

（あぐつつ……お、おひりの、中まれええ……全部っ、掻き混ぜられてえっ……煮込まれた、みたいにいっ！ グチュグチュッ……ブチュブチュッて、音しちやううっ！）

卑猥な水音を響かせて粘膜を濡らし、吹きこぼれる淫液の感触に、身体を焦がす羞恥の炎はさらに激しく燃え盛った。ゾクゾクッと背筋を這い上がる快感の波に、粘膜は際限なく熱く蕩けだし、潤みだした愛液と腸汁が、勢いよく両穴から噴き上がってしまう。

「——つつ……呆れた、こんなものを私に引っかけようだなんてっ……」

淫汁の飛沫が散った瞬間、ヤミヨが打擲と杖の抽挿を緩めたおかげで、刺激は少し和ら

いだ。だが——情けをかけてそうしたわけでもないヤミヨは、ますます声を尖らせ、メイへの冷たい怒りを膨らませる。

「いいわ——あなたみたいならしない女の穴には、手痛いお仕置きをしてあげる」

それまでの愉快そうな嘲笑ではない。メイが情けなくもらした淫液がかかってしまったらしく、屈辱を受けた怒りを秘め、その声はわなわなと震えていた。

（なにっ!! なに、しようとしてるのっ……ヤミヨちゃんっ……っ……この、感じ——）

顔を彼女の秘部で塞がれるメイには、彼女がなにをしようとしているのかわからない。だが——肌を刺すようなピリピリとした空気の揺れが、不穏な気配を感じさせる。

強いて言うなら、闇の魔法が行使されようとしているような、恐ろしい予感を——。

（——まさか、そんなっ……嘘っ、だよね……っ!! いやっ……）

その恐ろしい予感に思考が辿り着いたと同時に、ヤミヨの潜めた声が頭上から響いた。

「おもしろしっぱなしで、締まりのないならしない穴みたいだけど……痛いほどの刺激を与えてやれば、少しは引き締まるわよねえ？」

「やっ……やめ——」

それを言い切るよりも早く、ヤミヨから感じられた魔力の波は杖に乗り、膨大な攻撃エネルギーへと変換され、杖を咥え込んだ直腸へ注ぎ込まれる。

——ピキッ……ピリピリピリイイッッ! バチバチッ、バチイーンッッ!

「いぎっ……いあああっっ!! んひいっ、いっひい——っ!!」

肉の引き裂かれるような痛みと、筋肉から力を奪い取る痺れと衝撃が同時に、凄まじい勢いで弾け、メイの過敏な性感帯に突き刺さってゆく。

「あつぐあああああつつ?! いひつつ、いひやひいいいいんつつ! やめへええつつ!」
「あははははははつ、情けない声だしちゃって! ほらつ、やめて欲しいって言うなら、緩めなさいよつつ! 杖をしつかり啞え込んで離さない……この淫乱ケツマンコをねえ!」

尻下に敷かれたメイが悲鳴を上げ、下半身を暴れさせて悶える姿を嘲笑し、ヤミヨが叫ぶ。その叫びとともに抽挿はさらに激しくなり、直腸から結腸、さらにその向こう側まで魔力の電流が注ぎ込まれていった。刺激と痺れが粘膜を貫くたび、痛みと快楽がドロドロと混ざり合い、メイの菊壺を淫らな生殖器へと変貌させてゆく。

（こ、んんんつつ、らつつあはあああつつ?! はひつつ、あうんぐうつつ……んぐつつ、くひいいいいつつ! イッツ……ぐううつ、イギツ……たくつ、ないのにいいつつ!）

痛くて、苦しくて逃げだしたいのに、身体中は快感で痙攣し、全身が力を失ってしまうのがわかる。度重なる羞恥と陵辱で触手に刻み込まれた快感は、苦悶という感情で痛みと結びつき、魔法を浴びせられることが気持ちよくてたまらなかった。

「イッ——ぐううんつつ?! んひああああつつ、まらああつ! はああつ、イグううつ……わらひつ、イツちゃうううつつ! まらつ、イッてるのにつ、なんれええつつ!」
「ケツ穴に攻撃されて、イツちゃつてるっていうのつ?! ほんつと……どうしようもない変態魔少女ねつ、この学校の生徒会長様はつつ……変態女つつ、淫乱マゾ豚あつつ!」

トドメとばかりに放たれた電撃が粘膜を貫き、菊壺全体へ快感とともに染み広がる。もはや下半身はメイの言うことなど聞かず、ガクガクと反射だけで震えを繰り返し、完全に脱力して弛緩していた。

「んっいいいいつつつ……ああああつ、はあつ、あぐううつつ……おつ、おあああつ……やつ、みつつ、よひゃああつ……ふぐつつ、んっおとおおつつ……」

その震えが下腹部に突き刺さり、ブルブルと背筋が震えるのを感じる。この感覚は幾度となく味わわされたものと同じ——絶頂直後の排泄欲と、まったく相違ないものだった。

「ふにゆううつつ!? ふぎつつ、あつ、はああつ……んあぐつ、あはあああつ! らめつ……ああああつつ、こ、こえええ……や、ヤミヨ、ひゃんつ……とめへえええ……」

「はあん、あなたひよつとして——ふつつ……」

メイの反応に気づいたヤミヨは薄く微笑むと、顔の上から腰を遠ざけてゆく。新鮮な空気が流れ込み、呼吸が楽になりましたが、それに喜んでいる暇などない。

「些細な反抗ってことかしらね……だけど、そういうのは自分で浴びればいいわ。変態女には相応しいものよね——浴尿なんて下劣な行為はっ!」

「やつ——ひぎやつ、ふうううつつ!! んっああああつ、やめつ——ああああつつ!!」

強く足を引かれ、腰が——否、股間が完全に顔の真上に持ち上げられた。不安定な体勢がメイの身体感覚を奪い、筋力を蕩けさせ、折れ曲がった身体は下腹部を圧迫する。

（んっくううつつ! もれ、ひゃううう……）

押された刺激に腰がわななき、淫裂がビリリッと切ない痺れに満たされていった。その痺れにトドメを刺された括約筋は蕩けるように弛緩し、限界まで引き締めていた尿道が瞬く間に緩んで――。

「あつ――あつ、やあつつ……んくつ、ふあああつ……あああああつ……」

決壊した小孔を押し開いて黄金水が噴きだし、独特の臭気を振り撒きながら、屈辱と熱さを以てメイの顔中に降り注ぐ。

――ボジョツツ……ジョボボボボツ、ジョロロロロ……ジョバアア――ツツ！

「いやああああつつ、あぐうつつ!! んぶつつ、ぐぶつ……おぐううつ、ぶあつつ……」

「あはははははつ！ 馬鹿じゃないの、メイッ！ そんな状態で大口開いていたら、おしっこ飲んじゃうに決まってるじゃない！ まあそれだけ顔に浴びてれば、飲もうが飲むまいが同じことかしら？ 最低の惨めさよ、このおもらし女！」

言いながら、ヤミヨが電流を注ぐ乗馬鞭を抽挿すると、弛緩しているはずの菊肉は反射のように唾えついでしまい、ゾクゾクと背筋が粟立つ快感が込み上げる。快感に緩んだ尿道は、勢いある排尿によってさらに大きく開かれ、降り注ぐ小水の量と勢いが増したようにすら感じられていた。

「ひぐうううつつ！ おひつつ、ひいいつ……あぐつつ、おぶつ……んんううつつ！」

「本当に無様ねえ、メイ……くすつ……せつかくだし、記念撮影してあげるわ」



残った光の魔力をすべて私的運用したことにより、メイの魔力はすべて闇へと傾いた——その結果が、闇魔少女へと堕ちたメイの姿だった。

ヤミヨの魔力を上回る光の魔力を持っていたメイが、そのすべてを闇へと変換すれば、ヤミヨを上回るのはもちろんのこと、分離していたメイの闇の魔力を取り込みかけていたヤミヨの阻害魔法を、逆に飲み込むこともできる。そうしてメイは、ヤミヨの魔法を取り込み、そこに含まれる魔力から、彼女の想いというものに触れたのである。

（ごめんね、八千代ちゃん……でも、気づいたから——もう、大丈夫だから……八千代ちゃんが一番になれるよう、私も協力するからね……ふふっ♪）

それは、言葉での対話などより何倍も有益で合理的な、彼女の本音を引き出す行動だった。放送室で自慰に耽り、スピーカーでその音を響かせながら、メイは満足そうにうっとり微笑む。

（八千代ちゃん、いまでも見てるのかなあ……どうせなら誰かが来たあとくらいに来て、見てくれたらいいんだけど……さすがにそれは、贅沢だよね♪）

八千代の奥底に秘められた、あまりに歪んだ感情を知り、メイは闇への抵抗をすべて放棄した。彼女が自分を見てくれるのであれば、そのくらいのことなんでもないと、そう思ったからだ。

無論——メイがそんな発想をしてしまったことこそ、闇の魔力による影響だったのだが、いまとなつては気がつくこともない。メイはその道を自分で選んだのだと信じながら、そ

の身も心も、闇の魔力に掬め捕られてゆく。

光の側が懸命に闇を抑えようとしているのも、それだけ闇の影響が強力だと知っているからなのだが、なまじ光の力が強すぎたメイは、闇の怖さを知らない。知らぬままに闇に吞まれ、闇に堕ち、こうして——闇の扉を開く手伝いをしているとは、こうしているいまも、夢にも思っではいなかった。

「あつ……はあつ、んっ……んう？ あはっ、やっとなあ……もう、遅いよお♥」

そうしているうち、開いた放送室の前に誰かが立ったようだ。マイクに向けて続けた自慰の手を止めると、背中側のそちらを振り返って応える。

「さあて、と……私の処女を食べられちゃう、超ラッキーな人はあ……だあれっかな——
つて……えっっ!？」

拍子をつけて楽しげに呟いていたメイだったが、想像すらしていなかった事態に目を見開き、僅かに理性を取り戻していた。

「あなた……八千代ちゃんのっ……」

「そう——ヤミヨの契約者、リンドだ。そしてようこそ、闇魔少女メイ……歓迎しよう」
四つん這いで歩くその黒犬は、彼女との戦いで常に傍にいた、闇魔生物のリンドだったが、その体軀は心なしか以前より大きく、雄ライオンを思わせるほどのサイズで、逞しさと風格も増している。

(この声——そうだ、さっき頭に響いた、魔力をつていう声は……リンドの——っ……)

真面目にそんなことを考えたのも束の間、メイの興味はすぐさま、四つん這いの彼の腹の下で、激しい躍動を繰り返している巨大な肉塊の存在に移っていた。

(な……なに、あれえっ……す、ごっ……んくうっ……)

そんな食い入るようなメイの視線に気づいたのか、リンドはニヤリと口元を歪ませる。

「いぎ、正式な契約を——闇の魔少女としての、瑕疵なき契約を果たそうぞ、響芽衣」

「はあっ、あはああ……すっごく、おつきい♥」

赤黒く猛る巨根は、子供の腕ほどもあるような、極太で長大な肉の塊だった。人間に近い形ではあるが、その先端部、カリ首の周辺には無数の触手が生え揃い、イソギンチャクのようにうねうねと気味の悪い動きを晒している。

けれど、メイの目に映るそれはサキュミックからの陵辱を思いださせ、発情を煽るスイッチにしかない。目にしただけで蕩け、準備完了していた膣肉が、湧きだす蜜液でさらに淫らに濡れ、淫肉が割り綻んでゆく。

「んっ、くううっ……はあっ、あああ……で、もお……あなたは、私たちのお……敵っ、敵だったの……そんな相手に、されるなんてえ……」

身体の発情を感じていながら、自ら焦らすように躊躇いの演技を見せるメイだったが、視線はいまだ股間に釘付けになっている。先端部から先走りが滲み、それを触手襲が泡立たせ、ボタボタと滴らせるのを目の当たりにし、身体中を燃えるような淫熱が包み込んでいた。すぐにでも床に寝転んで、降伏する獣のように腹部を晒し、大腿を開いて牡を受け

入りたい——そんな欲求が頭に渦を巻いている。

「そう……君は敵に、それも私のようなケダモノに犯されるのだよ……触手相手にも大事に守ってきた純潔を捧げ、私と契約するのだ……いいね？」

「——っつ！ あっ……はっ……あんっ……」

ズシリと床を踏み慣らし、巨大な獣が股間を見せつけ、巨根を大きく跳ねさせた。

（あ——こ、んなっ……ので、犯されたら……こんな、太いのでっ……はああっ……）

息がかかるような至近距離で亀頭が揺れ、肉幹に浮かぶ太い血管までがはつきりと見えてしまう。漂ってくる濃厚な獣臭さ、牡臭さが顔中を覆い尽くすようだ。

（ゴツゴツの、ビクビクのっ……チンポオツ♥ ハ……ハメ、られたらあ♥ あっはあ……と、飛んじゃう、私っ……理性、飛んじゃうよおっ……絶対いっ♥）

それを突きつけられたところで、視界に火花が飛び散り——メイの本能は限界に達した。「は——は、いっ……はいっ、はいっっ♥ し、しますっ、契約っっ……」

気圧されるようにペタンと尻もちをつき、脚を大きくM字に開くと、その中心に自然と指が伸びる。太ももどころか膝下まで濡らすほどに滴る大量の愛液で、股間はグチャグチャになっていた。乳首や淫裂を覆う触手を開かせ、蕩けた桃色の媚肉を懸命に引っ張り伸ばし、己の大事な部分——その奥の奥までリンドの瞳に映しだし、強い牡に媚びる牝の顔を晒し、懇願してしまう。

「く……くださいっ、ここに……メイのオマンコにいつつ！ グチョグチョ、ドロドロに

なつた淫乱マンコツツ……リンドの……チ、ンポツ……」

黒犬から与えられたわけではない快感の数々が、ペニスを見ただけで、それがどれだけの肉悦をもたらしてくれるのかを、メイに教えていた。自分は彼に与えられる側、彼は与える側——すなわち、上の立場にあるのは黒犬のほうだと、メイの犠牲があつさりと理解し、絶対的な支配者に対して屈服させられてゆく。

「リ——リンド様の、チンポオツ♥ 遅しい、そのぶつといチンポツ……お、オチンポ様♥ 挿れてっ……処女膜破つて、蹂躪してっ……支配、してくださいっ」

媚びた声音で言い放つた瞬間、ゾクゾクゾクツツと凄まじい快樂の電流が脊髄を流れ、脳内が真っ白に染まる——。

(んっふうううっっ♪ お、おねだり、するのっ……させられるのっ、すごっ……ひいいっ……すっごい、気持ちいいよおっ……んはああっ……)

なにもしていない、服従宣言だけで本能を揺り動かされたメイは、尿口から透明の飛沫をプチ撒け、リンドの肉棒へ少しでも近づけるよう腰を浮かせる。

「はひゃっつ、早くっ、早くううっ！ ああっつ、ごめんなさいっ、はしたないおねだりしてごめんなさいいっ！ 私、最低の淫乱女なんですうっ！」

「そのようだな——我が、二人目のマスターよ！」

マスターと呼びながら、メイを心から見下した眼差しをぶつけ、リンドの腰がゆつくりと沈んだ。潤みきつた柔肉を割り開き、拳大の巨根がズブズブと捻じ込まれてくる。

「んぐっ……くひいいい——つつ♥んおおつつ……ほおつ、はああつつ♥」

圧迫感による痛みがほんの僅か、そしてその何百倍もの、気が遠くなるような快感刺激が粘膜に流れ込み、目の前が眩く明滅させられる。

——ズグチュウウツツ、ヌプツツ……ブチブチブチイッツツ！

（はひつつ、はひつてえええええつつ?! あぎつつ……ひぐうううつつ?! んあつつ、イクツツ……んつくうううんつつ イクツツ、イクううつつ!）

ブチブチと肉の引き裂かれる、純潔を破られた感覚が走り抜けるも、汚辱や嫌悪はもちろんのこと、痛みすら強く感じることはなかった。触手に肛門を穿り返されたとき、幾度となく味わったあの意識が浮き上がるような感覚が、膣口から粘膜を伝い、奥の奥まで染み込むように広がってゆく。

太いものなど触れたことすらないはずの膣口は、巨根によってひしゃげるほどに拡張され、一気に粘膜を伸ばしきり、ギチギチと卑猥な擦過音を奏でていた。

「んっあああああつつ！ こ、れええ……あぐつつ、あうううつつ！ これがつ、オチンポの、味いっ……んくつつ、ふあああつつ……す、ごおっ……」

押し広げられる感触は、リンドの体重が上乘せされるたびに奥へと食い込み、肉壁の筋を抉るように擦ってゆく。張りだした肉傘が膣肉の段差を引っ掻くたび、バチツバチツと頭の中で火花が弾け、メイの牝壺にアクメの波が満ちる。

「ふうっ、ぐううんっ……んひいいっ！ イクツツ、またイクうっ、んあはああつつ は

あつ、はああつ……イク、のおつ……止まんないっ……」

一度たりとも往復されていない、それどころか最奥まで貫かれてもいない——いや、そもそも初めての性交だというのに。破瓜挿入の刺激だけで、メイの身体と頭には、触手に与えられたものの何倍もの快感が注ぎ込まれていた。隙間を満たすように埋まってくる逞しい牡槍、その存在がどこまでもメイの牝性を刺激し、乱れろと命令する。

「んあぐううつつつ！ ふぐううつつ、んおつ、くおおおおんつつ♥ はあつつ、んまつつ、まだあああつ!? まだつ、奥つつ、くるのおおつ!？」

膣内から受ける感触と、絶え間なく訪れる絶頂によつて、すでに膣内は満たされているように思っていた。だが挿入は止まらず、メイがこれで全部かと思うたび、さらに膣奥を抉ってくる。

「んあああ……ら、めつ……こひいつ、ぬ……抜け、ひやううう……んつ、あぐうつ!？」

軽いアクメを連続で繰り返して、下半身はもはや、浮かせた腰を支えられなくなっていた。しかし、黒犬のペニスはその勃起だけで、落ちかけるメイの腰を支え上げると、お腹側の膣肉を削り取るように強く抉り、凄まじい刺激を与えてくる。

「くつひいいいんつ！ はあつ、あああ……強いよお、このチンポオツ……んつつううつつ……こんなのおつ、ぜ、絶対つ……勝て、ないっ……すごい、最強チンポオツ♥」

ヤミヨの杖を尻穴に挿入され、電撃を流されたのと同じような感覚が、牡肉によつて幾度も膣内に注ぎ込まれる。休む間もない快樂の連鎖に、獣に組み伏せられたメイもまた、

本能に忠実な獣に戻ってしまったかのようなだった。

「いいっ、ひいいっ……はへええ……あああつ、ずつと、イッてりゅううっ♥」

「ふん、堪え性のないことだ……」

だらしなく唇を開いて舌を垂らし、蕩けた瞳を垂れさせるメイの姿に、黒犬が嘲りの言葉を浴びせる。それに反発するどころか、悦びを訴えるように膣肉がキュウツと締まってしまい、さらなる快感に背筋がゾクリと震えた。

(あはああ……あ、呆れ、られへりゅうう……んらつ、らつてええ……いいんだ、もおんっ……ひ、ひかた、ないれひよおおっつ……)

開き直るような感情が胸中に浮かび、淫らに落ちきった自分を自覚して、下腹部がキュウツと熱く疼く。そんなメイの身体をより強く押さえつけたリンドが、僅かに腰を引いたかと思うと――。

「これだけ感度のいい器も相当だが――そろそろ手荒に行かせてもらおうぞ、マスター」

――ズグツツチュブウツツ！ グチュンツツ！

「ふぐうううっ!! んおっつ、おおおっつ……」

泥濘のようなドロドロの膣内を抉り、肉棒が激しい勢いで深くまで捻じ込まれる。それでもなお、リンドのペニスには余裕があるのだが――メイの膣壺のサイズが、その限界を迎えてしまっていた。

「ひっぐうううっつっ！ ほぐっつ、ほおっつ、ほっぐうううっつ……んひっつ、いひい

いっつ！ あああああつっ！ 挟られりゅっつ、お腹もつてかれへりゅうっつ！」

拳のように硬く膨らんだ巨根の亀頭が、鋭いボディブローのように子宮を突き上げ、黒犬の細かな腰遣いに合わせ、ゴツゴツと痛烈に叩く。子宮を抜けて容易く脳天にまで達したその快感の暴力に、メイはブリッジのように背中を反らして身悶えしながら、両手両足でリンドに抱きついてしまった。

「んいっ……りん、ろっ……ひやまああ♥」

意識してのものではなく、反射的に取ってしまった態度だが——その屈辱とみつともなさは、メイの心をダイレクトに刺激し、肉悦を生んだ。

「はあつ、あはあああ……そ、そえええ……そんならつ、ひゅよいろつ、らめつ……いぐつ、まらつ、いぐうつつ……んひつ、ひんりやうううつ♥」

犬のペニスでイキ死にさせられそうになり、そんな相手に全身で媚びながら、心はより快感を求めている。改めて実感する、自分がこの黒犬より圧倒的に下の身分であり、どうしようもなく快感とペニスに弱い、ダメな牝であるということ。

（はああつつ……私いっつ、さいっつ、てええつ♥ほんとつ、さいてえつ……最低のおつつ……チンポツツ、狂いっつ♥チンポ弱点のつ、淫乱マンコオツツ♥）



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義感に燃える少女達をたっぷり陵辱! ヒロインのピンチ満載!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
ドリームマガジン
DREAM MAGAZINE

コミック O M I C
UNREAL
アヴァンガル

正義のヒロイン
姦獄ファイル
Sins of Heroes

あなたのキモチイをお手伝い! キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル！

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル！

フリタム120%!?
シヤルにさらわれないドキドキ★ラブ！

とろ蜜美女めぐりの桃色バスツアー

リアルドリーム文庫

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプの？

二次元ぶち文庫

あの人気作品の
外伝作品もあり！
電子書籍でしか読めないライトノベル！

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ

「小説家になろう」の男性向けサイト「ノクター」の男性向けサイトから書籍化！

異世界お茶会
デキるお茶会

ドキドキラブラブな
ハーレム系
ライトノベル！

二次元ドリーム文庫